

陽司は再度、自分のパソコンに向き直った。

「えーっと、朝からミーティング二つで、午後から来客か。昼出てる暇ないなあ……」

陽司はため息をつく。

社長である陽司は、時間に追われる仕事が多く、それが立て込む時には昼食を食べに行くことも出来ない日もある。

本当に全く時間がない、と言うことはほとんどなく、五分十分程度は時間がある。

そのため、弁当やパンを買って来てもらい、食べることになる。

「もう、どこの弁当も飽きたんだが……仕方がないなあ」

「うんうん」

「じゃ、佳雲さん、カチ屋の日替わりで……って」顔を上げた陽司の視界に入る、笑顔のメイド。

「タマ、どうしてここに？ どうやって入った？」

「にやー」

机越しに満面の笑みの珠が、両手に持ったもの

を、陽司に差し出す。

「おべんとう」

珠は、陽司の質問には何一つ答えずににこやかに手を伸ばす。

ゴスロリ風メイド服を着た、ローティーンの少女が、オフィスの一番奥の社長に、弁当を手渡ししている。

その異様な光景に、社員たちは手を止め、そちらを見る。

普段は自分の世界に入り込んでいる佳雲ですら、手を止めて陽司と珠を見ている。

あの少女は、社長の何なんだろうか。

何かそういう店で出前を注文したんだろうか。

いや、それにしても若すぎる。

社長の恋人にしても、デリバリーのアルバイトにしても。

では、一体誰なのか。

社長はそういう趣味を持っているのか？

「あの……社長……」



そんな思いを代表して、亜希が声を出す。

「その子は誰ですか……?」

「……えっと」

その質問の答えを、事務所のほとんどの社員が待っていた。

だが、陽司は、何と答えていいか分からなかった。

本当のことを言っても信じてもらえるとも思えない。

とはいえ、一人暮らしのはずの部屋に同居している少女と言うのは、説明も難しい。

「たかさき たま」

それに答えたのは、のんきな本人だった。

話が自分のことであるということを理解したのか、自分の名前を口に出した。

「高崎……? 社長の御兄妹ですか?」

亜希の更なる問い。

だが、それはなかなか的確な答えだった。

「えー、いや、うーん、兄弟じゃなく……その、

うん、ああ、親戚。親戚の子なんだけど、今東京に来て、うちに住んでるんだ」

陽司は何とか辻褄を合せてみる。

「そうですか……」

その答えは功を奏し、大抵の社員はもう興味を失い仕事を続ける。

ただ、亜希は、最後まで珠を見ていた。

本人である珠は何も事情を知らないまま、にこにこ笑っている。

陽司は弁当を受け取り、軽くため息をつきながら、腰を下ろす。

珠は、机越しに陽司を見つめ続けている。

「なでて」

「……帰ってからな」

陽司はさつきより重いため息をついた。

※